

早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因

岩脇陽子¹⁾, 滝下幸栄¹⁾, 今西美津恵²⁾, 松岡知子¹⁾, 山本容子¹⁾, 西田直子¹⁾, 宇野真由美³⁾, 鈴木ひとみ⁴⁾

- 1) 京都府立医科大学医学部看護学科
- 2) 京都府立医科大学附属病院
- 3) 元京都府立医科大学医学部看護学科
- 4) 神戸常盤短期大学看護学科

Factors Related to Learning Effects of and Feelings of Satisfaction for the Early Exposure of Fundamental Nursing Practice

Yoko Iwawaki¹⁾, Yukie Takishita¹⁾, Mitsue Imanishi²⁾, Tomoko Matsuoka¹⁾, Yoko Yamamoto¹⁾
Naoko Nishida¹⁾, Mayumi Uno³⁾, Hitomi Suzuki⁴⁾

- 1) School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine
- 2) University Hospital, Kyoto Prefectural University of Medicine
- 3) Formerly School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine
- 4) Department of Nursing, Kobe Tokiwa Junior College

Abstract

Fundamental nursing practice, the first step of clinical practice, is important for nursing students to facilitate their early, gradual introduction to clinical practice. As part of this fundamental nursing practice, first-year students have been exposed to nursing practice on one day in June for the past 4 years. Factors related to the effects of this early exposure of students to fundamental nursing practice on their learning and levels of satisfaction with this style of clinical practice were investigated based on their self-evaluation.

- 1) Students' relevant experiences before entering the college included admission to a hospital (31.6%) and one-day nursing experience (48.8%).
- 2) Nursing roles they had successfully observed included monitoring/recording/reporting, understanding the patient, daily life support, ensuring security and safety, environmental adjustment, respecting the patient's independence, empathizing with the patient, assistance during treatment, mental support, cooperating with other professions, and guiding the patient.
- 3) The achievement levels of the practice goals "to observe the site of nursing practice" ($p<0.01$) and "to observe nurses actively performing duties" ($p<0.05$) were significantly correlated with students' satisfaction levels.
- 4) The effectiveness of prior study or individual guidance on self-defined targets, an orientation held in the ward, and observation of nurses in service had significantly affected students' satisfaction levels. A student's success in understanding a nurse's roles in the practice was significantly correlated with his/her satisfaction level.
- 5) An effective commitment of the tutor nurse to students' learning had a significant impact on their satisfaction levels.
- 6) Students' attitudes toward the clinical practice, such as viewing it as preferable, interesting, or wanting to be a nurse, were significantly correlated with their satisfaction levels.
- 7) Providing students with an opportunity to communicate with patients in the practice was significantly correlated with their satisfaction levels.

These findings suggested that students viewed their early exposure to nursing practice as a valuable learning experience, and used it to develop themselves and prepare for the future. Since their interest in the clinical practice promotes their willingness to learn nursing, it is necessary to help them feel positive about the practice. Besides the importance of cooperation between clinical workers including the tutor nurse and teaching staff, and their explanations to students about the practice goals and levels, there is a need for those involved in teaching to review the practice contents. The necessity of appropriately designing the contents to facilitate students' communication with patients was also suggested.

Key Words : nursing education, early exposure, fundamental nursing practice, clinical practice, educational evaluation

1. はじめに

社会的ニーズの変化に対応できる看護基礎教育を行うため看護学教育の在り方に関する検討会では、看護実践能力の必要性が示された¹⁾。また学士課程における看護実践能力の検討において看護実践を支えるための臨地実習の重要性と方法の工夫の必要性が強調された。学士課程における看護実践能力の育成において臨地実習の意義は大きく幅広い教養を基盤に豊かな人間性に裏付けられた能力が求められる。学士課程における看護実践力の習得には講義、演習、学内実習、臨地実習を段階的に配置していくことが不可欠である。特に臨地実習という教育形態は意味深く、条件が整えば早期に体験させていく必要がある。早期体験学習では臨地実習の中で、学生が何を思い感じて、何を体験したかはその後の学生の成長に大きく影響を及ぼす。そのため、学生の主体的な学びの場としての臨床学習環境を整えていくことは重要である。

早期から段階的に臨地実習での体験を大切にするという観点から、臨地実習の第一段階である基礎看護学実習の役割は貴重であり、入学まもない1年生6月に見学実習として早期体験学習を企画してきた経緯がある^{2,3,4)}。早期に実際の臨床の場を見学することで、その後の学習の動機づけとなっていることは早期体験学習^{5,6)}や見学実習⁷⁾の報告にもみられる。しかし、基礎看護学実習に特徴的な内容に関する研究が少なく^{8,9)}基礎看護学実習における学びの分析^{10,11)}や実習体験を検討した研究^{12,13)}、早期体験学習におけるレポート分析¹⁴⁾、実習目標から検討を加えた研究¹⁵⁾はあるが、早期体験学習としての基礎看護学実習の実習効果に何が関連しているのかを明らかにした研究はみられない。

これらのことから早期体験学習における教育評価および実習に影響する諸要因の把握は、実習指導の指針を得る上で重要と考える。特に学生の実習の満足度に影響する要因について明らかにした研究はみられなかった。そこで、本稿では効果的な早期体験学習の展開方法を検討する目的で、早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と関連する要因を明らかにする。

早期体験学習としての基礎看護学実習の概要

基礎看護学実習は図1に示したように1年生に1単位と2年生に2単位を履修する。1年生の基礎看護学実習Ⅰは表1のように1年生前期1日と後期4日間に分けている。本稿で述べる早期体験学習としての基礎看護学実習は1年生前期1日の基礎看護学実習ⅠAを

指す(表2)。基礎看護学実習ⅠAのねらいは、看護者の活動の実際を観察し、看護の役割を知ることである。実習目標は、看護活動の場を観察できる、看護者が援助している実際を観察できるである。実習場所は成人系の病棟とし、学生配置人数は1病棟に6～7名とした。実習時期は1年生前期の6月中旬の1日である。実習内容は、環境面の観察として、病棟の構造や物品、病室の構造や物品、屋内環境、屋内気候、採光、騒音、色彩、安全、患者のプライバシーについての観察である。看護活動の観察として、看護者と患者のコミュニケーション、看護者の日常生活援助と診療の援助の観察である。実習方法はまず事前に学内オリエンテーションを行う。次に学生に自己目標を明確にして実習に臨ませるため、担当教員が自己目標を具体化できるように指導する。実習当日に実習目標の確認と実習に向けての注意事項を確認する。その後、学生の準備状況に応じて再度指導をする。病棟実習においては、病棟師長が病棟及び病室の構造・設備の説明、看護職員の紹介、病棟の特徴などのオリエンテーションを実施する。その後学生は看護師と行動を共にして援助の実際を見学する。病棟カンファレンスでは教員が司会進行を行い、自己目標の評価を中心に疑問点・学んだことの発表と師長からの助言を受ける。そして、午後

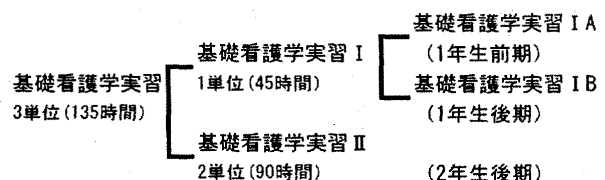


図1 基礎看護学実習の構造

表1 基礎看護学実習Ⅰの実習目的と実習目標

基礎看護学実習ⅠA(1年生前期1日)

実習目的

看護者の活動の実際を観察し、看護の役割を知る

実習目標

1. 看護活動の場を観察できる
2. 看護者が援助している実際を観察できる

基礎看護学実習ⅠB(1年生後期4日)

実習目的

患者と初歩的な人間関係を築き、「看護学の基本」で学んだ知識・技術・態度に基づいた日常生活の援助ができる

実習目標

1. 患者の生活状況を理解できる
2. バイタルサインの観察ができる
3. 看護技術の原理に基づいた日常生活の援助ができる
4. 病棟の看護師に適切な報告ができる
5. 患者とコミュニケーションをとることができる

表2 基礎看護学実習ⅠAの概要

対象学生	1年生 75名
実習時期	1年生前期(6月)
実習期間	1日(9時間)
学生配置	1病棟に学生6～7名 11～12カ所
実習日程	9:00 学内オリエンテーション 9:30 病院オリエンテーション 10:00 病棟オリエンテーション 10:30 病棟実習 11:30 病棟カンファレンス 13:30 学内グループ学習 14:00 全体の報告会 17:00 まとめ

の実習のまとめと報告会において、実習グループ単位であらかじめ設定された視点に沿ってグループ記録を作成し、全体で発表と討議を行う。

II. 研究方法

1) 対象者と調査時期

対象者は2002年～2005年の4年間に基礎看護学実習ⅠAを履修した学生300名である。実習時の報告会終了後に自己記入式の用紙を一斉に配布、記入を依頼し、その場で回収する方法で行った。

2) 調査項目

調査項目は、入学までの経験(入院経験、一日看護体験)、実習目標の達成度、実習内容の達成度、学習場面別の効果、実習全体からみた効果、指導者の効果的な関わり、実習満足度、実習に対する感情(実習中の緊張、実習が好き、実習は楽しい、看護職になりたい)、患者とのコミュニケーションの機会、見学できた看護の役割、実習の受けとめ方である。

なお実習目標および実習内容の達成度はよくできた(5)～全くできなかった(1)の5段階で回答を求めた。学習場面別の効果および実習全体からみた効果はよくできた(5)～全くできなかった(1)の5段階で回答を求めた。指導者の効果的な関わりはとてもそう(5)～全くそうでない(1)の5段階で回答を求めた。実習満足度は、非常に満足(5)～全く満足でない(1)の5段階で、実習に対する感情(実習中の緊張、実習が好き、実習は楽しい、看護職になりたい)は5段階で回答を求めた。患者とのコミュニケーションの機会、とてもあった(5)～全くなかった(1)の5段階でたずねた。

3) 分析方法

分析方法は、実習満足度を満足群(非常に満足・まあまあ満足)・非満足群(どちらとも言えない・あまり満足でない・全く満足でない)の2群に分け、実習目標、実習内容の達成度を1点～5点に点数化し平均点を求め平均値の差をt検定した。同様に実習満足度の満足群・非満足群と、学習場面別の効果、実習全体からみた効果の平均値の差をt検定した。また、実習満足度の満足群・非満足群と指導者の効果的な関わり(担当教員、師長、看護師)、実習に対する感情(実習中の緊張、実習が好き、実習は楽しい、看護職になりたい)の平均値の差をt検定した。

患者とのコミュニケーションの機会は、機会あり群(とても・まあまああった)と機会なし群(どちらとも言えない・あまり・全くなかった)の2群に分け、また入学前の経験は、入院経験の有無別・一日看護体験の有無別で、実習満足度の満足群・非満足群の出現頻度を χ^2 値を用いて検定した。

4) 倫理的配慮

倫理的配慮は無記名とし、成績には関係しないことおよび不利益を被らないことを説明した。

III. 結果

297名(99.0%)から回答を得て、分析した。

1. 対象学生の概要

分析対象学生の性別は女性96.6%、男性3.4%であり、年齢は18～31歳で平均年齢は 18.68 ± 1.35 歳であった。入学前の経験では、入院経験ありが31.6%、一日看護体験ありは48.8%であった。

2. 実習目標、実習内容の達成度の平均値

実習目標の達成度の平均値は、看護活動の場を観察できる 4.26 ± 0.72 、看護者が援助している実際を観察できる 4.30 ± 0.83 であった。実習内容の達成度の平均値は、病棟の構造や物品の観察 3.98 ± 0.76 、病室の構造や物品の観察 3.73 ± 0.90 、屋内環境の観察 3.81 ± 0.89 、安全について観察 3.68 ± 0.89 、患者のプライバシーについての観察 3.80 ± 0.90 、看護者と患者のコミュニケーションについて観察 4.55 ± 0.77 、看護者の援助について観察 4.10 ± 0.96 であった。

3. 学習場面別の効果と実習全体からみた効果の平均値

学習場面別の効果の平均値は、自己目標の事前学習 4.27 ± 0.72 、自己目標の教員による個別指導 4.49 ± 0.70 、

「看護覚え書」の事前レポート学習 4.19 ± 0.81 、学内オリエンテーション 4.36 ± 0.72 、病棟オリエンテーション 4.82 ± 0.42 、看護師の援助を観察 4.90 ± 0.37 、病棟カンファレンス 4.88 ± 0.36 、学内グループ学習 4.72 ± 0.51 、全体の報告会 4.57 ± 0.65 であった。

実習全体からみた効果の平均値は、看護の対象者を理解する機会 4.06 ± 0.83 、看護の役割を理解する機会 4.37 ± 0.70 、今後自分に必要なことは何かを考える機会 4.59 ± 0.64 であった。

4. 指導者の効果的な関わりの平均値

指導者の効果的な関わりの平均値では、担当教員の効果的関わり 4.58 ± 0.64 、病棟師長の効果的関わり 4.65 ± 0.58 、指導看護師の効果的関わり 4.58 ± 0.69 であった。

5. 実習満足度

実習は満足 of いくものであったかといった実習満足度については、満足群91.9%、非満足群8.1%であった。

6. 実習に対する感情の平均値

実習に対する感情の平均値では、実習中の緊張 4.22 ± 0.85 、実習が好き 4.20 ± 0.82 、実習は楽しい 4.25 ± 0.83 、看護職になりたい 4.47 ± 0.78 であった。

7. 患者とのコミュニケーションの機会

学生が患者と話をすることができたといった患者とのコミュニケーションの機会あり群は22.1%、機会なし群は77.9%であった。

8. 見学できた看護の役割

今回の実習で見学できた看護の役割は、重複回答で多い項目から観察・記録・報告205名 (69.0%)、患者の把握191名 (64.3%)、日常生活の援助188名 (63.3%)、

安全と安楽の確保187名 (63.0%)、環境調整161名 (54.2%)、患者の自立の促進156名 (52.5%)、患者の立場に立つ124名 (41.8%)、診療の介助109名 (36.7%)、精神的援助82名 (27.6%)、他職種との連携62名 (20.9%)、患者指導57名 (19.2%)、退院指導18名 (6.1%)、その他の役割8名 (2.7%) であった。

9. 実習の受けとめ方

今回の実習の受けとめ方では、重複回答で多い項目から、勉強になった277名 (93.3%)、貴重な体験になった248名 (83.5%)、もっと勉強しようと思った224名 (75.4%)、看護の責任の重さがわかった191名 (64.3%)、自分の成長に繋がった160名 (53.9%)、心構えがもてた142名 (47.8%)、新たな思いが湧いてきた118名 (39.7%)、不安になった104名 (35.0%)、健康の大切さがわかった64名 (21.5%)、希望がもてた38名 (12.8%)、わからないうちに終わってしまった27名 (9.1%)、実習の意義がわからなかった9名 (3.0%)、失望した3名 (1.0%)、意欲を失った3名 (1.0%)、その他12名 (4.0%) であった。

10. 実習満足度との関連

1) 実習目標と実習内容の達成度

実習満足度別の実習目標の達成度では、看護活動の場を観察できるの項目において満足群 4.32 ± 0.68 、非満足群 3.48 ± 0.85 で満足群の学生が有意 ($p < 0.01$) に、また看護者が援助している実際を観察できるの項目においても満足群の学生が有意 ($p < 0.05$) に非満足群の学生に比べて高値を示した (表3)。

実習満足度別の実習内容の達成度では、病棟の構造や物品の観察、病室の構造や物品の観察、安全につい

表3 実習満足度別の実習目標と実習内容の達成度

実習目標と実習内容	実習満足度	n	平均値	標準偏差	有意確率
看護活動の場を観察できる	満足群	272	4.32	0.68	**
	非満足群	23	3.48	0.85	
看護者が援助している実際を観察できる	満足群	272	4.35	0.79	*
	非満足群	23	3.70	1.02	
①病棟の構造や物品を観察	満足群	272	4.03	0.74	**
	非満足群	23	3.43	0.79	
②病室の構造や物品を観察	満足群	272	3.79	0.88	**
	非満足群	23	3.00	0.80	
③屋内環境(屋内気候、採光、騒音、色彩)を観察	満足群	272	3.85	0.88	*
	非満足群	24	3.38	0.82	
④安全について観察	満足群	272	3.74	0.87	**
	非満足群	24	3.04	0.95	
⑤患者のプライバシーについて観察	満足群	271	3.84	0.88	**
	非満足群	24	3.33	1.09	
⑥看護者と患者のコミュニケーションについて観察	満足群	272	4.58	0.73	
	非満足群	23	4.17	1.11	
⑦看護者の援助について観察	満足群	272	4.13	0.94	
	非満足群	23	3.74	1.18	
①～⑦は実習内容を示す			** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$		

て観察、患者のプライバシーについての観察の項目で満足群の学生が有意 ($p<0.01$) に非満足群の学生に比べて高値を示した。また、屋内環境の観察の項目でも満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した。

2) 学習場面別の効果と実習全体からみた効果

学習場面別の効果では、自己目標の事前学習、自己目標の教員による個別指導、病棟オリエンテーション、看護師の援助を観察の項目で満足群の学生が非満足群の学生に比べて有意 ($p<0.05$) に高値を示した (表4)。

実習全体からみた効果では、看護の役割を理解する機会になったとする項目で実習の満足群 4.41 ± 0.67 、非満足群 3.96 ± 0.86 と満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した (表5)。

3) 指導者の効果的な関わり

指導者の効果的な関わりでは、指導看護師の効果的な関わりの項目で実習の満足群 4.63 ± 0.62 、非満足群 3.96 ± 1.07 と満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した (表6)。

4) 実習に対する感情

実習に対する感情では、実習が好き、実習は楽しい、看護職になりたいの項目で実習の満足群の学生が有意 ($p<0.01$) に高値を示した (表7)。

5) 患者とのコミュニケーションの機会

患者とのコミュニケーションの機会の有無と実習満足度との関連では、患者とのコミュニケーションの機会あり群に実習満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に多かった (表8)。

6) 入学前までの経験

学生の入学前の経験と実習満足度との関連では、入院経験の有無、一日看護体験の有無別と実習の満足群と非満足群の学生に有意差は認められなかった。

IV. 考察

1. 早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果について

早期体験学習は医学教育¹⁶⁾の中でいち早く取り入れられ、わが国の文教施策における医学教育等の改善と充実および医療技術者の養成のため、カリキュラムや教育方法として早期体験学習の導入が謳われた¹⁷⁾。看護基礎教育においても比較的早く早期体験学習の効果の分析¹⁸⁾が始まっている。最近では、医学教育^{19,20,21)}だけでなく、歯学教育²²⁾や薬学教育^{23,24)}においても早期体験学習が実施され評価されつつあると言える。

本稿における早期体験学習としての基礎看護学実習

表4 実習満足度別の学習場面別の効果

学習場面別の効果	実習満足度	n	平均値	標準偏差	有意確率
自己目標の事前学習	満足群	271	4.31	0.70	*
	非満足群	24	3.83	0.76	
自己目標の教員による個別指導	満足群	272	4.53	0.66	*
	非満足群	24	4.08	1.02	
「看護覚え書」の事前レポート学習	満足群	272	4.20	0.80	
	非満足群	24	4.04	0.86	
学内オリエンテーション	満足群	272	4.37	0.71	
	非満足群	24	4.21	0.78	
病棟オリエンテーション	満足群	272	4.85	0.39	*
	非満足群	23	4.52	0.59	
看護師の援助を見学	満足群	272	4.93	0.28	*
	非満足群	23	4.52	0.85	
病棟カンファレンス	満足群	272	4.90	0.33	
	非満足群	24	4.71	0.62	
学内グループ学習	満足群	271	4.72	0.52	
	非満足群	24	4.71	0.46	
全体の報告会	満足群	272	4.56	0.66	
	非満足群	24	4.67	0.56	

* : $p<0.05$

表5 実習満足度別の実習全体からみた効果

実習全体からみた効果	実習満足度	n	平均値	標準偏差	有意確率
看護の対象者を理解する機会	満足群	272	4.10	0.80	
	非満足群	24	3.67	1.05	
看護の役割を理解する機会	満足群	272	4.41	0.67	*
	非満足群	24	3.96	0.86	
今後自分に必要なものは何かについて考える機会	満足群	271	4.62	0.59	
	非満足群	24	4.25	0.99	

* : $p<0.05$

表6 実習満足度別の指導者の効果的関わり

指導者の効果的関わり	実習満足度	n	平均値	標準偏差	有意確率
担当教員の効果的関わり	満足群	272	4.60	0.61	
	非満足群	23	4.39	0.94	
師長の効果的関わり	満足群	272	4.67	0.58	
	非満足群	24	4.42	0.65	
指導看護師の効果的関わり	満足群	269	4.63	0.62	*
	非満足群	23	3.96	1.07	

* : $p < 0.05$

表7 実習満足度別の実習に対する感情

実習に対する感情	実習満足度	n	平均値	標準偏差	有意確率
実習中の緊張	満足群	271	4.21	0.86	
	非満足群	23	4.30	0.88	
実習が好き	満足群	272	4.29	0.75	* *
	非満足群	23	3.22	1.00	
実習は楽しい	満足群	272	4.35	0.74	* *
	非満足群	23	3.04	0.88	
看護職になりたい	満足群	270	4.53	0.75	* *
	非満足群	24	3.83	0.87	

* * : $p < 0.01$

表8 患者とのコミュニケーションの機会と実習満足度との関連

患者とのコミュニケーションの機会		実習満足度		人(%)	有意確率
		満足群	非満足群		
患者とのコミュニケーション	機会あり群	63(98.4)	1(1.6)		*
	機会なし群	207(90.0)	23(10.0)		

Fisher の直接法

* : $p < 0.05$

のねらいは、看護者の活動の実際を観察し、看護の役割を知ることである。学生の入学前の経験では、入院経験がある学生が約3割、一日看護体験をしたことのある学生が約5割であり、この割合はほぼ一定で推移してきている²⁵⁾。看護の学生は入学前に入院経験や一日看護体験をある割合で経験していることを踏まえて、実習に向けてのオリエンテーションに活かしていくことが有効となろう。学生は早期体験学習における実習目標と実習内容は達成できているとし、実習における学習の場面を効果的であると評価していた。特に病棟オリエンテーション、看護師の援助の観察、病棟カンファレンスの場面といった実際の臨床現場で学習効果を強く感じていた。今回の実習において学生は、観察・記録・報告、患者把握、日常生活の援助、安全安楽の確保、環境調整、患者の自立の促進、患者の立場に立つ、診療の介助、精神的な援助、他職種との連

携、患者指導などが看護の役割であると観察できていることがわかった。

実習全体からみた評価では、看護の対象者を知ると同時に看護の役割を理解し、今後の自分に必要なことは何かを考える機会になったととらえていると言える。このような結果は、看護学を学ぶ学生が看護基礎教育の早期に看護の場を体験することで、看護への動機づけを強化する機会となる先行研究^{26,27)}と一致するものであった。さらに、学生は早期体験学習を貴重な体験として位置づけ、勉強になったこと、医療や看護の実際の現場を見ることで看護の責任の重さ、健康の大切さを実感すると共に、実習を通して自己の成長や今後への心構えに繋がったとしていた。一方、これから自分が実際に見学した看護者のようになれるのかなど将来への不安、あつという間に実習が終わってしまったなど、少数ではあるが失望したり意欲を失っ

た学生もいた。しかしながら、約9割の学生が今回の実習は満足するものであったとしており、学生にとっては自己目標以上のことを観察することができ、患者と看護者の関わりを目の前で見る貴重な時間となり、想像以上に患者にも近づくことができたことで新しい発見に繋がったと考えられる。

次に、早期体験学習における学生は実習中の緊張は高いが、臨地実習後は実習に対して比較的肯定的な感情を抱いていることがわかった。具体的には、実習が好きで楽しいという感覚を抱き、将来看護職になりたいと感じていた。何より実習に対する感情と実習満足度の関連では、実習が好き、実習は楽しい、実習を通して看護職になりたいとした学生ほど実習満足度が高かった。臨地実習において看護の楽しさを感じる体験は看護を学ぶ意欲を促進させる²⁸⁾。早期体験学習において学生が看護を主体的に学んでいくための動機づけを促していくためにも学生が体験する実習環境を整えていくことが教育の鍵となる。そのためには、臨地実習で肯定的な感情を抱けるように学生を支援していくことが大切である。

2. 学生の実習満足度に影響する因子と学習支援について

早期体験学習において、学生の実習満足度にどのような因子が影響しているのかをみてみることにする。看護活動の場と看護者の援助の実際を観察するといった実習目標の達成は学生の実習満足度に関連していた。実習内容では病棟・病室の構造や物品の観察、屋内環境、安全および患者のプライバシーの観察など主に環境面の観察が学生の実習満足度に関連していた。実習における学習場面では、自己目標を明確化し教員に具体的に指導を受けること、師長による病棟オリエンテーション、看護師の援助を実際に観察することと学生の実習満足度が関連していた。また、今回の実習が看護の役割を理解する機会としての学びとなることで学生の実習満足度を高めていた。さらに指導体制においては、担当教員、病棟師長、指導看護師の関わりを学生はほぼ肯定的に受けとめていた。とりわけ、学生にとっては指導看護師が自分に適切な関わりをしてくれることが実習満足度に影響することが明白となった。

歯学部学生の病院における早期体験学習を不満足および満足別で分析した研究では不満足の理由として実習時間帯や指導内容でなく、指導に当たった教員の対応や態度が不適切であったことを報告している²⁹⁾。当然

ながら指導者の学生への対応や態度が実習の満足度に影響する。早期体験学習における基礎看護学実習では指導看護師の対応や態度が学生の実習の満足度に影響していたことから、指導看護師への実習目標や1年生の学習のレベルの説明などを徹底していくことが大切である。また、学習場面では師長からのオリエンテーションや担当教員の個別指導なども実習満足度を高めていることから、学生への指導にあたっては、初学者であることを心に留めながら、学生の緊張を取り除き、平易な言葉による説明と学生を尊重した態度を心がける必要がある。臨床における学習を促進するためには、教育の質を確保することが重要であり、指導者側には豊かな教育経験が要求される³⁰⁾。臨地実習における実習環境の充実が優先されなければならない。また、医学部学生の医療現場での早期体験実習の指導を行った看護師側の評価を実習生の自己評価と比較³¹⁾した研究では、実習の面白さ、実習の意義やコミュニケーションの項目で指導看護師の評価が低く、看護師はもっと有意義な実習にしたいと反省していたことが報告されている。臨床実習に関わった看護師の学びに影響する要因を分析³²⁾した研究では、看護師が学生と関わることで得る学びは実習に対する関心の高さや責任と関連していることを示唆している。このように早期体験学習は学生だけでなく、受け入れる臨床側に良い刺激を及ぼすことも推測されるため、今後は臨床の指導者側から学習効果やその影響要因の検討を加えていく必要がある。

臨床の実習環境は学生の学習成果に影響を及ぼしており、その要因の一つに患者との関係が指摘されている³³⁾。今回短い実習時間の中で、患者と話すことができたといった患者とのコミュニケーションの機会を持つことが実習満足度に影響することが示された。臨地実習におけるコミュニケーションの教育が組織的に展開されていない現状が指摘されている³⁴⁾。臨地実習において効果的なコミュニケーションの教育を展開していくためにも教員と師長や指導看護師との連携を図ることが重要である。それらを踏まえて、早期体験学習では患者とのコミュニケーションの機会をもてるように実習目標の中で設定した上で、話しやすく、病状が安定した患者とのコミュニケーションの体験を実習方法の中で展開していくことが有効であろう。

V. 結論

早期から段階的に臨地実習での体験を大切にするとという観点から、臨地実習の第一段階である基礎看護学

実習は重要である。基礎看護学実習の一環として1年生6月に一日見学実習を4年間に渡り早期体験学習を実施した。そこで、学生の自己評価から早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と学生の実習満足度に関連する要因を検討した結果、以下のことがわかった。

- 1) 入学前の経験は入院経験31.6%、一日看護体験48.8%であった。
- 2) 実習でとらえた看護の役割は、観察・記録・報告、患者の把握、日常生活援助、安全安楽の確保、環境調整、患者の自立、患者の立場に立つ、診療介助、精神的援助、他職種との連携、患者指導等であった。
- 3) 実習満足別の実習目標の達成度のうち満足群の学生が非満足群の学生に比べて有意に高値を示した項目は「看護活動の場を観察」($p<0.01$)、「看護者が援助している実際を観察」($p<0.05$)であった。
- 4) 実習満足別の実習内容の達成度のうち満足群の学生が非満足群の学生に比べて有意に高値を示した項目は、病棟・病室の構造や物品の観察、安全・患者のプライバシーについての観察 ($p<0.01$)、屋内環境の観察 ($p<0.05$) であった。
- 5) 学習場面別の効果では、自己目標の事前学習、自己目標の個別指導、病棟オリエンテーション、看護師の援助の観察の項目で実習満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した。また、実習が看護の役割を理解する機会となった項目で実習満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した。指導看護師の効果的な関わりの項目で実習満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に高値を示した。
- 6) 実習に対する感情では、実習が好き、実習は楽しい、看護職になりたいの項目で実習満足群の学生が有意 ($p<0.01$) に高値を示した。
- 7) 患者とのコミュニケーションの機会あり群に実習満足群の学生が有意 ($p<0.05$) に多かった。

以上のことから、学生は早期体験学習を貴重な体験として位置づけ、臨地実習を通して自己の成長や今後への心構えに繋げていた。学生は看護の楽しさを感じ看護を学ぶ意欲を促進させるため、臨地実習を肯定的に受けとめるような支援が必要である。早期体験学習における基礎看護学実習では指導看護師の対応が学生の実習の満足度に影響していたことから、指導看護師への実習目標や1年生の学習のレベルの説明などを徹底していくことが大切である。また、今後は指導者側

からの検討も加えていく必要がある。さらに患者とのコミュニケーションの機会をもてるように実習目標で設定した上で、話しやすく病状が安定した患者とのコミュニケーションの体験を実習方法の中で展開していく必要性が示唆された。

謝辞

調査にご協力下さった学生の皆様に感謝いたします。早期体験学習の指導に携わって下さった病院関係各位、師長様はじめ指導看護師の皆様、本学の教員の皆様に心から感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 高等教育局医学教育課：看護学教育の在り方に関する検討会（第6回）議事要旨，2001;平成14年3月8日。
- 2) 岩脇陽子，藤田育子，錦志津子他（1997）：早期体験学習の学習効果についての検討-見学実習における学生の記録から-，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，7（1）：15-22。
- 3) 滝下幸栄，岩脇陽子（2002）：看護とコ・メディカルの教育 早期体験学習としての見学実習の学習効果-基礎看護実習の一環として-，医学教育，33（5）：405。
- 4) 岩脇陽子，滝下幸栄，西田直子（2003）：早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果，学士課程の1年生を対象として，日本看護研究学会雑誌，26（3）：288。
- 5) 桜井礼子，山口真由美（1999）：看護教育における初期体験学習の経緯と意義，大分看護科学研究，1（1）：20-26。
- 6) 高橋清美，中野榮子（2003）：学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足感-内発的動機づけによる実習効果，福岡県立大学看護学部紀要，1：29-39。
- 7) 柿原加代子，松田日登実，原田真澄（2004）：基礎看護学実習（見学実習）におけるレポート記述内容の質的分析-環境の援助技術の記述内容の分析から，日本赤十字愛知短期大学紀要，15：1-13。
- 8) 細谷智子（2001）：基礎看護実習に関する研究の分析-過去5年間の関連文献を通して，茨城県立医療大学紀要，9：147-155。
- 9) 木下由美子（2007）：看護学臨地実習における学生の学習目標達成度の評価に関する文献検討，九州大学医学部保健学科紀要，8：49-58。
- 10) 加藤法子，佐藤友美，高橋清美他（2003）：基礎

- 看護学実習Ⅰ実習内容の検討－実習レポートの分析から－，福岡大学看護学部紀要，1：71-78.
- 11) 浜端賢次，兼光洋子，石本傳江（2005）：社会福祉施設を活用した基礎看護学実習Ⅰの学び，川崎医療福祉学会誌，14（2）：429-436.
 - 12) 金城忍，嘉手苅英子（2007）：実習記録から見た基礎看護学実習Ⅰにおける学生の体験と学び，沖縄県立看護大学紀要，8：32-38.
 - 13) 浅井直美，小林瑞枝，荒井真紀子他（2007）：看護早期体験学習における学生の意味化した経験の構造，Kitakanto Med J，57：17-27.
 - 14) 皆川敦子，北村真弓，三好陽子他（2006）：早期体験学習における看護学生の学び－早期体験学習後におけるレポートからの分析－，日本看護医療学会雑誌，8（2）：33-43.
 - 15) 岩脇陽子，滝下幸栄（2005）：学士課程の基礎看護学実習における実習目標の関連する要因. 京都府立医科大学看護学科紀要. 14：11-19.
 - 16) 山田瑞枝（1985）：早期臨床体験（early clinical exposure）について，医学教育，16：129-131.
 - 17) 文部省（1995）：わが国の文教施策，254-255.
 - 18) 佐藤佳子，砥綿とも子，津田茂子他（1989）：当短大における早期体験学習の効果の分析，聖マリア学院短期大学紀要，4（1）：39-46.
 - 19) 月澤美代子（2000）：順天堂大学医学部における早期体験学習の一環としての外来患者付き添い実習の試み，順天堂医学，46（2）：219-226.
 - 20) 月澤美代子，篠原厚子，村山尚他（2004）：順天堂大学医学部1年生における早期体験学習としての老人福祉・医療施設実習の導入と教育評価，順天堂医学，49（4）：492-501.
 - 21) 堤明人，伊藤聡，高屋敷明由美他（2006）：医学部1年生への早期体験学習としての外来初診患者エスコート実習の試み，医学教育37（5）：305-310.
 - 22) 齋藤高弘，釜田朗，島村和宏他（2007）：早期体験学習における教員側から抽出された問題点の検討，奥羽大学歯学誌，34（2）：63-70.
 - 23) 真野泰成，野口隆志，山田治美他（2007）：早期体験学習（Early Exposure）の実施とその評価－国際医療福祉大学薬学部における取り組み，医療薬学，33（8）：702-709.
 - 24) 高山明，大西憲明，橋詰勉他（2007）：京都薬科大学における早期体験学習の評価 病院・薬局見学の学部1年次生のアンケート調査から，医療薬学，33（8）：680-686.
 - 25) 前掲書 3)
 - 26) 前掲書 2)
 - 27) 出口禎子，宮川昌子，梶山祥子（1995）：基礎看護学実習における見学実習の意義－学習の動機を高める臨床の学び－，東邦大学医療技術短期大学紀要，10：51-62.
 - 28) 前掲書 6)
 - 29) 齋藤高弘，高橋和裕，釜田朗他（2007）：病院早期体験学習方略の検討－不満足および満足な学生の分析，奥羽大学歯学誌，34（1）：9-19.
 - 30) Sandra V. Dunn, Paul baurnett（1995）：The development of clinical learning enviroment scale, Journal of Advanced Nursing, 22：166-1173.
 - 31) 安成憲一，浅田章，山野恒一他（2004）：医療・福祉現場での早期体験実習における医学部実習生の自己評価と看護師の評価，医学教育，35（2）：121-126.
 - 32) 高橋方子，竹本由香里，丸山良子（2003）：臨地実習に関わった看護師の学びに影響する要因の検討，宮城大学看護学部紀要，6（1）：35-42.
 - 33) 前掲書 30)
 - 34) Audit Commission（1993）：What seems to be the matter. Communication Between Hospitals and Patients, HMSO, London.